

被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁

国指定史跡 小峰城跡

伝統工法用いて石垣を修復

釜石市鵜住居・旅館「宝来館」の岩崎昭子さん

震災翌月、女川一中に入学した生徒たち

伝承ロードをゆく 第2回 福島県広野町・檜葉町・浪江町

福島県新地町・復興フラッグ広場

復興が進んだ今が正念場・宮城県山元町

道の駅やまだおいすた



伝統工法用いて石垣を修復

国指定史跡 小峰城跡

小峰城跡の本丸西面の石垣。
地震により幅21^{cm}、高さ10^{cm}
にわたり崩落しました

2010年に国史跡に指定された小峰城跡は、その翌年に起きた東日本震災により、石垣の大規模崩落に見舞われました。城山公園内に19年にオープンした「小峰城歴史館」には、被災直後の様子から約8年間にわたる石垣復旧の過程までを写真パネルで紹介するコーナーがあり、地震の脅威を後世へと伝える場にもなっています。

小峰城は1300年代ごろに築かれ、江戸時代の初代白河藩主・丹羽長重によって、現在に名残をとどめる石垣造りの城郭へと改修されました。その後、戊辰戦争で城内の建物が焼失しましたが、平成に入り三重櫓や前御門が復元され、白河市民の憩いの場になっています。

震災で震度6強の揺れに見舞われた小峰城跡の石垣は、本丸の西・南・北面をはじめとする9カ所が崩落。さらに4月11日に発生した震度5強の余震でも崩落が起き、その規模は総延長約160^m、面積約1500平方^mに上り、震災による文化財被害の中でも最大規模といわれています。

石材一つ一つを元の位置に積み直すという途方もない工事でしたが、震災発生から約8年を経た19年春に修復が完了。これに合わせ、小峰城の歴史と、震災発生から石垣修復完了までの経過を伝えるガイダンス施設「小峰城歴史館」が園内にオープンしました。

修復の過程を紹介

「小峰城歴史館」では、築城から近現代までの歴史をパネルで紹介するほか、歴代城主ゆかりの古文書や美術品を展示しています。また、江戸時代の城の様子をCGで復元した臨場感たつぶりの「VRシアター」やお城クイズ、VR望遠鏡を搭載したジオラマなどを設け、楽しみながら歴史が学べる施設です。

入り口からすぐの場所に設けられているのが「小峰城石垣修復の記録」と題された大き

な写真パネル。無残に崩れた石垣を写した航空写真では当時の被害の大きさが伺えます。その後の約8年にわたる石垣復旧の過程も順を追って分かりやすく紹介。江戸時代の構法を用いた修復方法についても知ることができます。

「まずは当館に立ち寄って、石垣復旧の過程を知っていたらいいから、現物の石垣を見てほしい。きつと見え方が違ってくるはずですよ」と学芸員の小野英二さん。

三重櫓への入場は午前9時～午後5時(10～3月は午後4時まで)。「小峰城歴史館」の開館は午前9時～午後4時半(入館は午後4時まで)。月曜(祝日の場合は翌日)と年末年始は休館します。入館料は一般300円で高校生以下は100円。歴史館は当日に限り何度でも再入場が可能です。

MAP

所在地/福島県白河市郭内
TEL0248-27-2310(白河市文化財課)
TEL0248-22-1147(白河観光物産協会)

石垣修復の現場を市民に公開

白河市文化財専門研究員の鈴木功さん 小峰城歴史館専門学芸員の小野英二さん

震災当時、白河市の教育委員

員会に所属していた鈴木功さんは、地震で無残に崩れた石垣を目の当たりにし、「目の前の状況が信じられなかった」と当時の衝撃を振り返ります。

被災から約1カ月後、改めて現場を確認すると、完全に崩落した10カ所以外にも各所にひび割れやゆがみが見つかり、最終的に15カ所が修復の

対象となりました。

「現場を訪れた鈴木和夫市長から『被害は甚大だが必ず元通りにする。市民にもありのままを伝え、未来につながる修復を成し遂げよう』という言葉があり、私たちも気持ちを新たにしました」と鈴木さん。

崩落した石垣約160箇のうち50箇所ほどは、昭和50年代にコンクリートで修復された

部分であり、石垣の多くは揺れに耐えることができたことから、文化財としての価値を継承していくためにも、再び江戸時代の伝統工法を用い、落ちた石材を一つずつ元の場所へ積み直すことにしました。

修復作業では、崩れた約7000石全てに番号を振り、落ちていた場所や形状を記録した「石材カルテ」を作成。被災前の写真とカルテを照らし合わせ、一つずつ位置を特定し、約1年半をかけて施工図を作成しました。

鈴木さんは「私たちが持っている写真では到底足りなかったため、市民の皆さんや、全国の城郭研究者にも協力をお願いしました。おかげで崩落箇所全域の写真を集めることができました」と感謝します。

小峰城の経験伝える

修復は震災前に見学ルートになっていた清水門から三重槽にかけてを優先的に行うこ



石垣修復完了に合わせて整備された歴史館

とになり、全国から集まった石工が作業に当たりました。

また月に1度、一般公開日を設けて工事の進捗を市民に見せる場を設けたほか、石垣背面に使用する「栗石」に、復興への思いをつづつてもらおうイベントを開催。震災を後世に語り継いでもらうため、地元の小学6年生を対象とした現場見学会も実施しました。

「心配だからと工事中毎日のように足を運ぶ市民もいました。これまで当たり前のよう存在していた小峰城が被災したことで、お城への愛着が改めて呼び起こされたのかもしれない」と鈴木さんは話します。

今回の工事を災害復旧の事例として役立ててもらったため、16年に地震で被災した熊本城や18年の豪雨で石垣の一部が崩れた丸亀城に修復で培った



石垣修復の過程や方法をパネルと映像で分かりやすく解説しています

経験や知恵を提供しました。

崩れた石垣の修復は19年3月27日に完了。その後見学コースの再整備が行われ、震災を教訓として、再び地震が起きた時に人が石垣の崩落に巻き込まれないよう、園路や転落防止の安全柵の配置などを工夫しました。

「石垣は多くの皆さんの努力によって元通りになりましたが、今後も震災の記憶が途絶えないよう、歴史館の展示などを通して伝承していきます。市民の復興のシンボルである小峰城跡を未来に残していくため今後も整備・活用に努めたい」と小野英二さんは語りま

す。小峰城では観光物産協会のツーリズムガイドが毎日常駐していて、城の歴史や石垣修復作業について無料でガイドを行っています。



写真左から鈴木功さん、小野英二さん

思いを
((発信))

語り部の傍ら裏山整備

釜石市鶴住居・旅館「宝来館」の岩崎昭子さん

「人が歩かなければ道はできない」。釜石市鶴住居の沿岸にある観光旅館「宝来館」の岩崎昭子さんは語り部活動の傍ら、防災や震災伝承の一つの形として、震災前から続けてきた旅館の裏山の避難道と避難所のさらなる整備をライフワークにしています。防災や観光振興に取り組む一般社団法人の代表も務め、海を舞台に環境学習の教育にも力を注ぎます。



岩崎昭子さん

鶴住居地区の東側にある根浜海岸は、日本の白砂青松100選に認定された風光明媚な場所でしたが、大津波

が襲来。沿岸の高さ10m強の所にある4階建ての宝来館も2階まで浸水しました。昭和30年代、この地に両親が開いた

旅館を継いだ岩崎さんは、1993年の北海道南西沖地震での津波の様子を見て裏山に避難道を、95年の阪神・淡路大震災をきっかけに旅館を鉄筋コンクリート建ての建物にすることを思い付きました。

この地で津波被害に遭った嫁ぎ先の義祖母から「津波が来たら山に逃げるだけ、と言われたことがずっと心の中に残っていた」と岩崎さん。思い付いたことを一つずつ実現してきましたが、2011年3月11日、大地震が起きて津波がまたもこの地を襲いました。「きょうは山に逃げる日だ。建物の中にいたいとは思わなかった」と振り返ります。

この年の夏からは復興支援



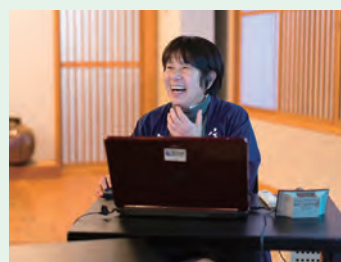
ボランティアらの協力も得て、避難所や避難道の整備を進めてきた

た旅館を継いだ岩崎さんは、1993年の北海道南西沖地震での津波の様子を見て裏山に避難道を、95年の阪神・淡路大震災をきっかけに旅館を鉄筋コンクリート建ての建物にすることを思い付きました。

この地で津波被害に遭った嫁ぎ先の義祖母から「津波が来たら山に逃げるだけ、と言われたことがずっと心の中に残っていた」と岩崎さん。思い付いたことを一つずつ実現してきましたが、2011年3月11日、大地震が起きて津波がまたもこの地を襲いました。「きょうは山に逃げる日だ。建物の中にいたいとは思わなかった」と振り返ります。

この年の夏からは復興支援

させるのが私の今の目標」とほほ笑みます。



語り部活動では被災体験だけでなく、未来についても語る

語り部活動にも一層、力を注ぎます。震災からの13年、鶴住居地区は多くの復興支援がありました。「今では語り部といわれるが、助けてもらっていることへの御礼と報告義務があると思つて始めた」と振り返ります。

一方で「実は長い間、家族の中ではあの日のことを話すことはなかった。被災地の家族はみな、同じような思いだったかもしれない。まだ心の整理がついていなかったし、また津波が来るかもしれないという気持ちが強かった」と心境を明かします。

「過去を土台に、どう未来へつないでいくか。つなぎ続ける人がいなければならず、子どもや若者に震災伝承に参画してもらうことが大切」と岩崎さん。「そのような場をつくるのが大人の責任であり、私たちの役目でもある。裏山の整備もそのようなきっかけの場にした」と意気込みます。

10年かけて21カ所に石碑設置

震災翌月、女川一中に入学した生徒たち

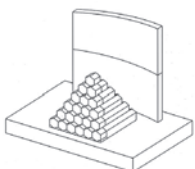
「1000年後の命を守る」。宮城県女川町で震災翌月に中学生となった生徒たちの合言葉であり、「女川のちの石碑」設置の原動力となりました。石碑の1基目と21基目には、生徒が詠んだ「夢だけは壊せなかった大震災」という同じ俳句が刻まれました。生徒たちは今や成人となり、夢と活動の幅をますます広げています。

震災翌月、当時の女川町女川一中(現・女川中)に64人の生徒が入学しました。津波被害に直面した子どもたちが現実と未来へどう向き合うのか。同校ではそれまで経験したことのない課題が山積しました。その年の5月には国語科で俳句の授業に取り組みました。

現実を直視しつつ、未来に向けて教訓だけでなく、夢や希望を感じさせてくれる俳句がいくつも出来上がりました。「夢だけは…」もその一つです。

後に1年生が取り組む「1000年後のいのちを守るプロジェクト」担当の社会科教諭の阿部彦彦さん(現・石巻市北上中学校長)は「大人はつらい現実を見

せないようにしていたが、子どもたちはきちんとしていた。次に向けたメッセージを発信しようとしていた」と振り返ります。1年生は社会科の授業で「女川のためにできることは何か」を考え①絆づくり②高台に避難できる町づくり③震災を記録に残す④の三つを挙げました。③が町内にある21カ所の全ての浜の津波が来なかった場所に石碑を設け、震災伝承とともに再び津波が来たときは、さらに高い所へ避難を促す取り組みです。石碑を建てたための募金活動を繰り返し、修学旅行先でも呼びかけました。



正立方体となる21個の正立方体を積み重ねたピラミッド型の石碑の図案

教科書作りに取り組む1基目は在学中の2013年11月、津波の難を逃れた同校の広場に建立。その後も数を増やし21年11月には21基目が完成しました。石碑は高さ2.2m、横1mほどで1基ごとに違う俳句と自分たちが得た教訓などが刻まれています。在学中に1基目を見届けた生徒たちは中学校卒業後も月2回集まり、「女川1000年後の命を守る会」を立ち上げ、さらなる活動として「女川命の教科書」作りに当たりました。阿部さんも会の主宰として生徒たちの活動を後押しします。「高校で同級生から『いつまで震災のことを引きずっていないの』と言われ、ショックを受けた子も前を向いて活動してきた」と阿部さん。17年3月には第1弾の中学生向け教科書が完成しました。メンバーは成人となった今も、最後となる21個の正立方体を積み重ねたピラミッド型の石碑の建立や「女川1000年後のいのちを守る希望館(仮称)」の建設と世界文化遺産の登録を目指し、全国各地での講演活動や、年末に合宿をして話し合いを続けています。

女川のちの石碑
千年後の命を守るために

夢だけは壊せなかった大震災

2011年3月11日、東日本大震災津波列強より高い



教えるたちと一緒に21基目の石碑完成を喜ぶ阿部さん(左) 2021年11月

3・11伝承ロード推進機構 発足5周年・震災伝承施設紀行文

伝承ロードをゆく

第2回 福島県広野町・檜葉町・浪江町

取材／一般財団法人3・11伝承ロード推進機構 事業部長 佐藤勝也

青森、岩手、宮城、福島の4県でツーリズムや、映像アーカイブなどの活動を行っている3・11伝承ロード推進機構の職員が第1分類、第2分類を中心とする「震災伝承施設」を直接取材。「3・11伝承ロード」の意義と役割を改めて考えながら、東日本震災の教訓と災害への備えを学びます。

訪問者の想像促す

地震、津波、原子力災害という未曾有の複合災害を経験した福島県双葉郡。今回は、一般社団法人ならはみらい移住促進係係長の平山将士さんとともに檜葉町の天神岬スポーツ公園を訪ねました。

天神岬に設置されているのが第2分類の震災伝承施設「津波防災対策ビューポイント『みる一る天神』」。展望デッキの階段を上ると視界が大きく開け、遠くに大海原と、首都圏に電気を供給する広野火力発電所、眼下には津波被害が甚



復興への願いと希望の思いを込めた「みる一る天神」の展望デッキ

大だった前原・山田浜地区の展望が広がります。

「このきれいな海があの日、姿を変えてしまいました。ここにはかつて家があって、戻れない人が今もいます。視覚で訴えるものが少ない檜葉町では、今は穏やかなこの光景を見ながら想像してもらおうかありません」とホープツーリズムガイドとしても活動する平山さん。

「震災の記憶が薄れ、東日本大震災を知らない世代も増えている今、この町の経験をいつか自分の身に起こるかもしれない出来事として『自分事化』

「震災伝承施設」とは?



東日本大震災の事実や記憶、経験を伝承する「3・11伝承ロード」を構成する施設で①震災の教訓が理解できるもの、②震災時の防災に貢献できるもの、③震災の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの、④災害における歴史的・学術的価値があるもの、⑤その他、のいずれか1つ以上に該当することが条件。①～⑤1つ以上の条件を満たす施設を「第1分類」、加えて公共交通機関等の利便性が高かったり、近隣に駐車場があったり、来訪者が訪問しやすい環境にある施設を「第2分類」、さらに案内員が配置されていたり、語り部活動が行われたりといった来訪者の理解やすさに配慮している施設を「第3分類」としています。



- 1 津波防災対策ビューポイント“みる一る天神”**
福島県双葉郡檜葉町大字北田字上ノ原地内
- 2 福島いこいの村なみえ**
福島県双葉郡浪江町高瀬文六10
問／TEL0240-34-6161
- 3 請戸漁港** 福島県双葉郡浪江町請戸中島12
問／相馬双葉漁業協同組合 請戸事務所
TEL0240-34-4121
- 4 震災記念公園(広野町)**
福島県双葉郡広野町下浅見川本町3

仮設住宅を再利用

してもらおうきっかけの入り口として、この場所を案内しています」と教えてくれました。

JR浪江駅から車で約5分。宴会場やセルフフロウリュ付きの大浴場を備えた宿泊施設「福島いこいの村なみえ」も震災伝承施設第2分類に登録された施設です。

避難解除直後、浪江町への帰還準備を進める住民たちの

一時滞在施設としても活用されたのがコテージタイプの宿泊棟。かつて二本松市で利用されていた応急仮設住宅20戸を改修、再築することで低コストかつスピーディーに整備できたと言います。

「浪江の住民たちの再会の場、復興の拠点としても重要な役割を果たしました」と振り返るのはフロアマネージャーの西内隆さん。コテージは全室浴室やトイレ

「震災を伝えられる人の育成も課題です」と平山さん



「コテージはロフトも新設され、居住性を高めて改装されています」と説明する西内さん



高度衛生管理を実現した荷さばき施設と請戸漁港



レ、IHキッチンを備え、中庭でバーベキューも可能。今では家族旅行から学校・企業の研修、浪江町への移住希望者の滞在体験施設などにも幅広く利用されています。

故郷への思い強く

「地域の防災と基幹産業を支える『請戸漁港』の震災伝承看板が立つのは「常磐もの」の中でも特に質の高い海産物ブランド『請戸もの』の水揚げで知られる請戸漁港。

漁船や荷さばき施設、海岸堤防までもが甚大な津波被害を受け、原発事故で浪江の全町民が避難する中で漁業者の避難先も広域にわたりました。

一方で町を代表する産業である漁業の復興は地域の悲願。行政の後押しも受けて2013年に災害復旧工事が始まり、19年10月には高度な衛生管理を実現した荷さばき施設が完成、20年4月に請戸

地方卸売市場が再開しました。

かつて90隻を超えていた漁船は震災前の3分の1程度になり、漁業関係者の多くが新たな生活拠点からの遠距離通勤を続けていると言います。「以前は家から海まで徒歩1分程度でしたが今では片道1時間半以上かかる人も。それでも『請戸が好き』という思いで通い続けています」と相馬双葉漁業協同組合の玉野真喜さん。

近年は従来のシラウオなどに加えてサワラ、太刀魚といった魚種も多く捕れるようになりました。組合では地元小学校などから要望があれば見学者を受け入れ、安全で質の高い海産物を届けるための工夫を発信。地域の学びの場にもなっているようです。

防災町づくり続く

広野町の「震災記念公園」は震災伝承施設第1分類に登録された施設です。ひろの防災



「請戸産の魚介は道の駅など地元でも味わえますが、多くが首都圏に出荷されています」と相馬双葉漁協の網谷(あみや)信行さん

緑地の一角に震災の被害状況や、原発事故による全町避難を経て復興・再生に着手した経緯を記録した東日本大震災記念碑が立てられています。

同町復興企画課課長補佐の久保田隆之さんによると、公園のある下浅見川地区は震災時に8・7メートルの津波が押し寄せ、民家から消防団の屯所当時建設中だった橋桁まで集落全体が流されるほどの甚大な被害を受けたエリア。盛り土で防災力を高めるなどして地区の大半が現地再建を果たしました。

車で約5分のJRR広野駅には間もなく新たなコンパクト駅舎が完成。旧駅舎を改修した町営のコミュニティ交流施設も新設され、JRR利用者らに最寄りの避難所などの防災情報も発信していくそうです。経験と教訓を生かした災害に強いまちづくりが現在も進行していることを実感します。



東日本大震災記念碑の前で震災当時の様子と復興の状況を案内してくれた久保田さん

記憶を残す
明日のために

被災地にはためくシンボル

福島県新地町・復興フラッグ広場

そのフラッグ(旗)は東日本大震災からの復興を目指し、また、生まれ変わった津波被災地のシンボルとなりました。福島県新地町の復興フラッグ広場。ポールの頂上部で大きなフラッグがはためきます。第2分類の震災伝承施設としての広場を含め、一帯は釣師防災緑地公園として町の新たなにぎわい創出の場はもちろん、津波防災、震災伝承の場として新たな役割を果たしています。

復興フラッグは現在のもの けた日章旗を掲げたのが始まりです。元々は震災直後、釣師地区の捜索活動に当たった自衛隊が被災物をポールに仕立て、がれきの中から見つ

場所に掲揚されました。

その後、ボランティアらが寄せ書きした3代目の旗が2代目と同じ場所に掲げられました。赤い日の丸の中に書かれた「蘇生」の文字が被災者を元気づけましたが初代、2代目と同様に劣化。これに心を痛めた地元のパイク愛好家と全国のツーリング仲間らが、ヨットの帆に使われる丈夫な生地の人々の笑顔と応援メッセージをデザインした4代目を制作し、2014年の元旦に掲げられました。

笑顔を再び見たかった

復興フラッグの管理団体「リバイバルF」のメンバーでもある釣師防災緑地公園パークセンターの川上照美さんは「パイク愛好家の皆さんの思いと協力に感動した」と喜びます。釣師地区は防災緑地公園に生まれ変わり2019年12月にオープン。復興フラッグも公園整備中の一時移転を経て20年2月に戻りました。

復興フラッグ広場は公園整備前に掲揚されていた場所で、園内のほぼ中央に当たります。高さ約8メートルのポールの上で横

165センチ、縦70センチほどのフラッグが潮風を浴びながら大きくはためきます。公園のシンボルのみならず、新地町復興のシンボルでもあります。

東京ドーム約4個分の園内には他にも、子どもの広場、ランバイクトラック、パンブトラック、オートキャンプや



釣師防災緑地公園は家族連れが足を運ぶ憩いのスポット



所在地/福島県新地町谷地小屋字釣師地区内
(釣師防災緑地公園)
TEL0244-62-2730

「釣師地区のにぎわいや訪れる人々の笑顔を再び見たかった」と川上さん。震災時は同地区在住で津波にのみ込まれましたが九死に一生を得ました。現在は震災時の様子を伝え、復興フラッグを紹介する活動を担います。「震災直後はなんで生き残ってしまったのだから」と悩んだが、今ここで、このような仕事をするためだと気付いた」と前を向きま



みんなの笑顔と応援メッセージが書かれた4代目のフラッグ



復興フラッグの案内板を説明する川上さん

町創生の本格的なスタート

復興が進んだ今が正念場・宮城県山元町



震災当時の山元町

などらかな海岸線が広がる温暖で風光明媚な宮城県

山元町は、東日本大震災で大津波が襲い、住宅や交通インフラなどの生活基盤はもちろん、農地なども甚大な被害を受けました。震災前から地方特有の人口減や高齢化も進み、被災でさらに拍車がかかりました。復興が進んだ今こそ、町創生の本格的なスタートライン。就任2年半が過ぎた橋元伸一町長は「あせらないで あわてないであきらめないで」をモットーに町政のかじを切ります。



お話を伺った方
橋元伸一町長

山元町は震災で町域の4割近くに当たる約24平方キロが浸水。この地域に約9000人、3000世帯弱と町全体の半数を超える町民が生活していました。死者は637人、家

屋の全壊2217棟（うち流失1013棟）、大規模半壊534棟を数え、海岸線から1キロの範囲は家屋の大半が流失し、多数の犠牲者を出しました。

橋元町長は当時、JR山下駅前まで代々続く食料品店と簡易郵便局を営んでいました。出先で大きな揺れに遭い、店に戻って妻や長女、父と店内や自宅の被害を確認後、そろって避難しようとして外に出た矢先、最大2層ほどの津波が襲ってきました。妻と長女は避難できましたが、町長と父は津波に流されました。町長は助かりましたが、父は低体温症により町長に抱かれながら亡くなるという壮絶な経験をしました。

橋元町長は「海から1.5キロ。海と店の間にある常磐線も約2層の盛り土の上であり、津波が来るとは思わなかった。沿岸部の方向から避難を広報し



「山元町震災遺構 中浜小学校」は津波襲来時、屋上に避難した児童と教職員、保護者ら90人の命を守り抜いた

ているのが聞こえたが、まさかうちまで来るとは。油断があった」と振り返ります。

やがて山元町の復旧・復興がスタート。町では常磐線の内陸移設と新駅を核にした「つばめの杜エリア」など三つの市街地を整備するコンパクトシティ構想を基軸としました。「復旧を飛ばして復興が先に決まったように見えた」と橋元町長。

住民生活向上を目指す

当時は町の復興会議の委員を務めていました。「被災世帯が新たに家を建てるのなら、まとまった方が行政サービスも集約できる。コンパクト自体は間違っていない」としつつ、「新市街地に新たに誕生するコミュニティはどう考えるのか、既存の集落とどうつなぐのかなど課題が多い」と話します。

「被災者の一人として、まちづくりの役に立てないか」と2015年11月から22年2月まで町議会議員、22年4月の

町長選で初当選しました。

橋元町長は「今より住民生活をどう向上させるか、この2年半、細かい隙間を埋める作業の連続だった」と語ります。定住化策などが功を奏し、削減可能性自治体からは外れませんでした。「高齢化自体、悪いことではない。むしろこの町で安心して老後を暮らすにはどうすべきか考える契機になる」と強調します。

現在は地域公共交通計画の策定や町民バスの運行事業の見直しを進め、町民生活を支えるインフラとして利便性の高い公共交通システムの構築を目指しています。

町内には「山元町震災遺構 中浜小学校」「山元町防災拠点 山下地域交流センター」「山元町東日本大震災慰霊碑「大地の塔」など震災伝承施設が点在します。「中浜小を残すかどうか賛否両論があったが、今ではやまもと語りべの会等関係各位の努力があり主要な震災伝承施設の一つとなった」と橋元町長。「さまざまな知り合いを連れて来るリピーターが多い。何度も足を運んでもらえることが大切。町としても施設の一層の整備やPRに努めたい」と語ります。

山田町の観光の入り口 豊かな恵みの魅力を発信

道の駅やまだ おいすた

三陸沿岸道路山田ICの近くにある「道の駅やまだおいすた」は海と山に囲まれた山田町の新たな観光拠点。「おいすた」の名称は当時中学生だった町民のアイデアで、特産品であるカキ(オイスター)と、「おいでよ」の意味が込められています。2023年7月の開業以来、町内外から幅広い世代が訪れています。



天井が高い平屋の建物は町のシンボルである大島と小島をイメージしたデザイン。半屋外の通路を挟み、産直売店やレストランが入る棟と、観光情報コーナーや休憩スペースを備える棟に分かれています。外の緑地部分は「かきくけ公園」になっていて、ふわふわドームなど遊具もあります。

駅長の関口健さんは「山田町は自然に恵まれ、非日常を楽しめる素晴らしい環境が魅力。リゾート地を訪れている気分になっていただけよう、館内に植物を置くなど、くつろげる空間を目指しています」と笑顔を見せます。

今、道の駅が整備されている場所には、岩手県立山田病院がありました。東日本震災で津波が押し寄せ、1階は浸水。病院は2016年、高台に移転し再建されました。関口さんは宮古市で生まれ



育ちましたが、祖母の家があった山田町は子どもの頃から何度も遊びに来ている思い出深い場所です。津波と火災に襲われた光景を目の当たりにし、「私が知っている山田町はありませんでした」と沈痛な面持ちで振り返ります。

ICそばの好立地

21年に三陸沿岸道路が全線開通し、山田ICそばに新たな道の駅の建設計画が進められていました。縁あって道の



駅の指定管理者に選定された地域商社「山田プライド」に就職した関口さんは、開業半年前に駅長に就任。今は従業員や山田町、地域の人々と連携して運営に当たっています。

目玉は産直売店「オイスター」です。町を中心に三陸沿岸復興支援に協力してくれた自治体などの約80団体が登録し、生鮮品や加工品を出品しています。オリジナルの商品も並びます。

関口さんは「海に近い道の駅なので、水産物が売り場の

山田町の震災伝承施設

第3分類

- 山田町まちなか交流センター
下閉伊郡山田町川向町6-24

第2分類

- 御蔵山復興祈念公園
下閉伊郡山田町八幡町269番、270番

第1分類

- 津波石碑(大海嘯記念)
下閉伊郡山田町船越(船越駅北)
- 津波石碑
(三陸大海嘯溺死者慰霊塔)
下閉伊郡山田町船越(海蔵寺)
- 津波石碑(大海嘯記念)
下閉伊郡山田町船越町の浜(県道入口)



7



6

- ① 周囲の自然と調和する建物
- ② 目移りする品ぞろえの産直売店「オイスタ」
- ③ テラス席からはかきくけ公園を見渡せます
- ④ 観光情報コーナーでは観光や震災伝承について紹介
- ⑤ 「おいすたフェス」ではカキむき体験も
- ⑥ 特産のカキは殻付きで販売
- ⑦ 道の駅やまだ おいすたのオリジナル商品



3



4



1



震災をきっかけに転職
「大好きな山田町を盛り上げたい」

インタビュー

道の駅やまだ おいすた 駅長
関口さん

元々、アパレル企業の会社員。エリアマネジャーとして担当する店舗を回っていて、3月11日は宮古市にある店舗にいました。海から離れた場所だったので津波被害はありませんでしたが、立ってられないくらい大きな揺れでした。その直後は携帯電話が繋がったので、津波が襲来する前に宮古市にいる家族の無事を確認できました。間もなく停電になり、津波が来たことを知ったのは11日の夜です。妻の実家が海の近くで心配でしたが、規制線が張られて近づくことはできませんでした。13日に家族と再会し、その後、妻の実家周辺まで様子を見に行きました。津波で流された車が電柱に刺さっているなど悲惨な状況でした。

店はしばらく通常の営業はできず、津波被害で服を失った方々に商品を解放しました。大切な人や物を失った人があまりにも多く、これまでの日常が当たり前ではなくなりました。宮古市の内陸にある自宅は津波被害に遭わず、家族も無事でしたが、私には他にやるべきこと、できることがあるのではと思い転職を決意。宮古市内や田老地区を中心に、子どもの居場所や高齢者が交流できる場の創出に取り組みました。

そんな時、山田町に新たな道の駅が建設されると聞きました。子どもの頃から大好きだった山田町ににぎわいをもたらすことに関わりたいと考え、開業の半年前に道の駅やまだ おいすたの駅長に就任。山田町を盛り上げる拠点にしたいですし、前に進んでいる町の現状を伝える場にもしたいです。



5

半分を占めています。いけすを設置し、生の魚介類も販売しています。刺し身は地元の方にも『安い』と好評で、ネタが大きいにぎり寿司も人気です。生産者の顔が見える売り場を心掛けています」と紹介します。レストラン「うみつぶく」

では海鮮丼やにぎり寿司、磯ラーメンなど多彩なメニューが楽しめます。
イベントやチャレンジショップを企画し、幅広い世代に立ち寄ってもらえるように工夫。観光情報コーナーでは山田町をはじめ周辺の観光に加え、震災伝承に関する情報も発信

をしています。関口さんは「ここを観光の入り口に、町内を巡ってもらえたら。町全体を盛り上げる拠点にしたいです」と意気込みます。
三陸鉄道岩手船越駅近くには1995年に開業した「道の駅やまだ」がありましたが、現在は「産直ひろばふれあいパーク山田」に改名し直売所として営業。将来的には町内2カ所目の道の駅を目指し、共に観光の拠点になることが期待されています。

「日帰りバスツアーを募集します」

復興のまちづくりを学ぶ 女川デスティネーション事業

「出島大橋と女川の復興を体感する」～女川町新探訪ガイド～

時間	行程
9:00	仙台駅東口 集合
10:20～11:20	・女川まちなか交流館 (復興のまちづくり座学) ・震災遺構旧女川交番見学
11:40～12:10	出島と出島架橋見学
12:30～13:30	シーパルピア女川(昼食とお買い物)
14:00～15:00	女川原子力発電所PRセンター
17:00	仙台駅東口 到着・解散

※雨天決行



東日本大震災で被災した宮城県女川町おながわちょうの復興を余すことなく体感できるプログラムです。被災地の中でいち早く復興した女川町は、女川港を正面に太平洋のオーシャンビューが目玉で、防潮堤で海や港が遮られた他の市町村にはない景観が広がります。その復興のまちづくりの紹介や、港の前の震災遺構旧女川交番を見学します。

また、出島が巨大なアーチ橋の完成で陸続きになり、その出島大橋からは透明度の高い穏やかな海や島々を見渡せる美しい風景が一望できます。

牡鹿半島は震災の震源から最も近く、そこにある東北電力女川原子力発電所は大津波を防ぎ、PRセンターなどに避難を求めた地域住民に、普段入ることができない構内の体育館を提供し、3カ月間避難所として活用されました。原発計画時から津波対策と向き合い、住民の信頼性をどのように構築したのか、この出来事も紹介します。

ご旅行実施日:2025年2月16日(日)

ご旅行代金:大人1万6000円、小学生8000円

※貸し切りバス代、昼食代、説明ガイド料、復興のまちづくりの座学、女川原発PRセンター施設案内、添乗員費用、土産(小学生はなし)が含まれます。未就学児は無料ですが、バスの座席や食事などはありません

最少催行人員:5人 定員:40人

旅行企画・実施/

お申し込み・お問い合わせ:近畿日本ツーリスト株式会社仙台支店

TEL022-222-4141 FAX022-221-6188

表紙

被災地を歩く

市民の思いが積み上がる

ケルン・鎮魂の鐘と光(久慈市)

久慈市の久慈港に面したJC公園内にあるケルン(石積み)をモチーフにした円すい形のモニュメントで、第2分類の震災伝承施設となっている。市内で発生したがれきを土台として、その上に市民が持ち寄った石を積み上げた。「復興のしるべに」との願いを込め、ケルンの表面には市内の子どもたちが「絆」「心ひとつに」などと思いを記した石を配置し、東日本大震災の教訓を後世に伝えていく。

モニュメント頂上部の高さは久慈市を襲った津波の最大高と同じ海拔14.5m。モニュメントの脇には鎮魂と希望の鐘が設置されている。鐘を鳴らすと公園内はもちろん、風に乗って海にまで広く響き渡る。震災発生日時に合わせ、毎年3月11日14時46分には太陽光がケルンの中に設けた通し穴を抜けて鐘を照らすという。まさに「鎮魂の鐘と光」だ。2016年には「希望郷いわて国体」に出席

するため岩手県を訪れた秋篠宮ご夫妻が、この地を訪問。被災者や地域住民らとともに鐘を鳴らし、海に向かって黙礼された。

モニュメントの設置に向け、市内のNPO法人が主体となり、市民に1口500円のワンコイン寄付を呼び掛けたほか、企業や団体からも協力を得て完成し、2015年5月に除幕式を行った。久慈市は震災のみならず、明治や昭和の三陸地震津波でも大津波に襲われている。「鎮魂と復興、そして次への教訓に」。市民の思いが石という形になって積み重なっている。



所在地/岩手県久慈市長内町第42地割(JC公園内)